特集　この人に聞きたい

中学校教育に望むこと

東京大学・慶應義塾大学教授

鈴木　寛　先生

鈴木　寛（すずき　ひろし）先生（略歴）

東京大学教授、慶應義塾大学教授
文部科学大臣補佐官、日本サッカー協会理事、社会創発塾塾長、元文部科学副大臣

一九六四年生まれ
　東京大学法学部卒業
一九八六年　通商産業省に入省
　慶應義塾大学ＳＦＣ助教授
二〇〇一年　参議院議員初当選（東京都）。一二年間の在任中、文部科学副大臣を二期務める
　参議院憲法審査会幹事、超党派スポーツ振興議連幹事長、東京オリンピック・パラリンピック招致議連事務局長、超党派文化芸術振興議員連盟幹事長や日本ユネスコ委員も歴任
二〇一二年四月　一般社団法人社会創発塾を設立
二〇一四年二月　東京大学公共政策大学院教授、慶應義塾大学政策メディア研究科兼総合政策学部教授に同時就任
　十月　文部科学省参与
二〇一五年二月　文部科学大臣補佐官

大阪大学招聘教授（医学部・工学部）、中央大学客員教授、電通大学客員教授、福井大学客員教授、和歌山大学客員教授、日本サッカー協会理事、ＮＰＯ法人日本教育再興連盟代表理事、独立行政法人日本スポーツ振興センター顧問、ＪＡＳＲＡＣ理事

編集部　今日は、お忙しいところお時間を頂戴しまして、ありがとうございます。

全日本中学校長会の機関誌「中学校」で、「この人に聞きたい」という新しい企画を今年からスタートさせました。記念すべき第一回目として、鈴木先生から「中学校教育に望むこと」ということでお話を伺いたいと思います。よろしくお願いいたします。

鈴　木　中学校の先生方には、講演の冒頭にいつも申し上げているんです。私はＯＥＣＤの教育政策のアドバイザーにも二〇一五年の十二月に就任したのですが、ＰＩＳＡ調査を見ても、二〇一二年が直近ですけれども、日本の一五歳は国語リテラシーは三四か国中一番。科学的リテラシーも一番。数学は二番で、加盟国中、総合一位なんです。二〇〇〇年代に「フィンランド詣」が騒がれましたけれども、全ての項目でフィンランドを上回っているわけです。このことは本当に素晴らしいことです。

もちろん、不登校の問題とかいじめの問題とか発達障害を含めて、今、多様な特別なニーズに応えていかないといけない。そういう課題はありますけれども、こと学力の面で見れば、まさに世界一の一五歳に、小学校の先生と中学校の先生が協力して、育てている。素晴らしい成果をあげているということを、講演のテーマが何であれ、いつも最初に、私は申し上げているんです。

そこで、今は、その世界一の一五歳を、高校で更に伸ばし、大学で花開かせていますか？と問うてみると、いろいろとやるべきことがあるのではないかということで、目下、我が国の教育政策では、高大一体改革が重要課題となっているのです。まさに中学校の先生方に申し上げたいことは、本当によくやっていただいていますということなんです。

もちろん、教育ですから、完璧ということはないわけで、この調子をどうやって維持するかということかなと思っていまして、二〇一五年のリサーチが二〇一六年の末に公表になりますけれども、どういうことになりますか。トップ、タイトルを守るというのはなかなか難しいのでしょうが、そんなに落ち込むこともないでしょうから、トップクラスは維持できるとは思います。

ただ、ＯＥＣＤ・ＰＩＳＡの話を先にしてしまいますと、二〇一五年は、コラボレーティブ・プロブレム・ソルビング・スキル、つまり、協働して問題を解決する力という分野を一つ増やしています。これがどうなるのか、半分どきどき、半分楽しみ。この成果を見極めて、それに対する対応や対策は、考えていかなきゃいけないなと思ってはいる

のですが、世界一に復活した、そのことにまず自信をもっていただきたいということを、中学校の教職員の皆さん、一生懸命、各現場をリードしてこられた中学校校長の先生方に御礼申し上げたいということです。

日本は、いいことは言わないんですよね。いつも講演会で、「日本が一番に復活したこと、知っていた人？」と聞くと、ほとんどいないんですよ。二〇〇三年のときに読解力が一二番に下がった、それを「知っている人？」と言うと、みんな手を挙げる。テレビや新聞でも繰り返し繰り返し、何万回、何千回と、悪いことは報道するんだけれども、いいことは言わないんです。これはアンフェアですよね。

これはメディアがまず悪いんですけれども、メディアだけの責任ではありません。駄目だと否定する記事や番組は視聴率が上がるんですよね。いいというニュースは視聴率が上がらないんですよ。テレビ、新聞も、ＮＨＫ以外は、基本的には商業メディアですから、売れる記事、売れるネタを優先的に取り上げようということになりますよね。逆に言うと、テレビの先に、自己否定的なことを好む、あるいはそういうものを思わず見てしまう、オーディエンスがいるということなんです。

では、そのオーディエンスは誰が育てたんですか？という問題で、僕も本籍は大学ですが、我々、教育側が、人の悪いところばかり目について、いいところをいいねと言えない、そういう減点主義的な国民を育ててしまったともいえる。もちろん、これは別に教育だけの責任ではありませんが、社会全体が減点主義になっている。校長先生の皆さんとは、この悪循環をどうやって、好循環に変えていけるか御一緒にやりたいなということです。その起点が中学校にあるんじゃないかなと。

例えば、中学校も含めて、教員の児童生徒あるいは学生に対する評価よりも、生徒同士の評価のほうが厳しいですよね。そう思いませんか。

編集部　確かに、なかなか厳しいですよね。

鈴　木　他人に対しては厳しいですよね。僕のゼミでは学生に相互評価させるんです、第一次案は。最終的には僕が直しますけれども。自分のことは棚に上げて、友人に対してめちゃめちゃ厳しいなと思います。

だから、まずは仲間のいいところをもっともっと見つけ

るということを中学校のうちから、高校のうちから、大学のうちから実践していく学校文化、そういうものをつくり出すことが大事なんじゃないかなと思います。実は、学校の教員も、できていない生徒のできていないところに、すぐ気付き、そこから入る。お互いがお互いを心の底からリスペクトするというか、彼はああいうところが素晴らしいよと。みんなそれぞれ素晴らしいところが違うんだけれども、ダイバーシティで、仲間、生徒、他者のいいところを見つけて、それをもっともっとリスペクトする。

今のテレビばかり見ていたらそうなりませんよね。人をくさす、その影響を受けているんです。人間が育つプロセスでは、家庭教育、学校教育、社会教育、地域教育、それからメディアの影響は、すごく大きいですよね。だって、中学校でも、授業時間は年間一、〇一五時間以内です。一方で、平均的な日本の児童・生徒がテレビを見ている時間は年間一、〇〇〇から一、五〇〇時間ですから。僕がいつも言っているのは、日本の児童生徒は、実質は、民放テレビ局通信制中学校所属の生徒なんですよ、一番の所属は。二番目に所属しているのが家庭で、三番目が学校なんです、情報空間的にいえば。幾ら学校側が、いい情報、いいコミュニケーション、いい教育をしても、テレビが勝つんですよ。さらに、そこに加えて、ＬＩＮＥだとかネットだとか。要するに、学校がいくら頑張ったって、それの倍の時間、テレビとネットにさらされているわけです。

ですから、学校教育というのは、自由な流れに委ねておいたら行われない大事なことを心して担わないといけないですよね。家庭がやってくれる、あるいは地域がやってくれる、地域もかなり崩壊していますけれども、あるいはテレビがやってくれる、ネットがやってくれることは教えなくていいんですよ。それらに任せておいたのでは、行われない大事なことは何なのかということをもう一回考え直す必要があります。

そうなったときに、まずは友人、他者の存在を大切に思い、そして相互に大事に思い合う、そういうことを学校が歯を食いしばって頑張るべきです。テレビに任しておいたら、そういう文化は生まれないわけですから。

中学校はそこまでいっていないと思いますけれども、高校になると、一生懸命勉強することを揶揄するわけです。今「意識高い」というのが揶揄する際の否定語になっていますよね。意識高いというのは、日本の学校では、友達をくさす、はぶるときの言葉で「あいつ、意識高い系」とか。社会のためにいいことをするとか、世のため人のためとか

いうと「意識高い」と言われる。そんな努力して実力をつけて、その先に何のいいことがあるの、テレビの前に出てくるのは、社長はおわび会見、官僚はバッシング、政治家は人間以下として扱われるシーンばかり。

スポーツ選手はこれまでよく取り上げられたんですが、最近はそのスポーツ選手もバッシングされていて、努力して何かに秀でて、そして、リスペクトを集めている人がテレビを通じては見えてこないんです。だから、何もしないで目立たないようにして、流されて生きていこうということになっていますよね。

そういう意味では、努力して何かができるようになって、そのことによって自立して貢献するということは大変、大事で尊いことなんだということは、学校がしっかり教えないと誰も教えてくれないんです。

ちょっと話は飛ぶんですが、私は、高校にはかなり参ります。高校生対象の講演会とかも。テレビの影響力を上回るためには、リアリティーをもった存在が生徒たちとフェース・ツー・フェースで接するしかないんですよね。

今、一生懸命いろいろな人に勧めているんですけれども、ＯＢ、ＯＧが母校の高校生との直接対話する機会をとにかく増やす。テレビをつけると、大人は悪いことばかりしているように思う。しかし、実際、社会で頑張っている先輩はいっぱいいるわけですよね。そういう頑張っている先輩と直接出会わせてあげるだけで、こんなに世の中のために頑張っている人がいるんだということにすごく感動するんです。昔よりも感動しますよ。テレビでの期待値が低くなっているので、そのギャップで、すごく効果があるんです。

大学生の話で恐縮なんですけれども、教え子で、政治家のインターンシップをやっているＮＰＯがあるんですが、インターンシップをやる前は、政治家の印象は物すごく悪いです。だけど、インターンシップをやると、我々から見ると、やや利権まみれの「大丈夫かな」という議員のところですら、物すごく評判が上がるわけです。いわんや真面目にやっている議員のところでは、評価がインターンシップの前と後では劇的に改善します。

話が戻りますけれども、いろいろな分野で現実に頑張っている大人と高校生との直接対話、私は神戸の学校なのですが、東京に母校の生徒が出てきて、合宿して様々なＯＢと一週間語るというプロジェクトを行っています。そうすると、この一週間で劇的に変わります。別にＯＢじゃなくても、生徒と同じような境遇であった方であれば、効果はあります。中学校であれば、同じ地域で育って、社会でい

ろいろ大事な役割を縁の下の力持ちで頑張っておられる方がいっぱいいますよね。そういう方のリアリティーに接する機会を意識して学校がつくり出す。そうすると、世の中には、テレビには出ていないけれども――九九・九九％の人はテレビに頻繁には出ていないわけですが、大事な仕事をしているということを、彼らは初めて実感できる。

昔は職業と家庭が近かったから、まだそこを感じられたんだけれども、今は、オフィス見学したって、みんなパソコンの前に座っているだけだし、重要な会議の部屋には入れないし、そこが肌感覚として分からない。だから、対話してもらう必要があるんです。

キャリア教育、昔、「13歳のハローワーク」という本を村上龍さんが出されましたよね。中学校というのは子供の終わり、大人の始まりで、一四歳ぐらいというのは本当に大事だと思うんですね。思春期にも入ってくるし、いろいろなことを考え始めるし、ここで初めて社会というものを見ていく。この一番大事なときに、縁の下の力持ちで社会を支えている多数の存在とリアリティーをもって、どれだけ出会っておくかということはすごく大事かなと思います。

もちろん、コミュニティ・スクールであれば、それが日常茶飯事で、地域の方々がいろいろな形で、自然な形で。「ようこそ先輩」、あれは否定しないんですけれども、教壇に立って授業するのも大事だけれども、そればかりでは駄目で、いろいろな形で、一緒に芝生のメンテナンスをするとか、一緒に花壇をやるとか、私は斜めの関係と言っていますけれども、自然な形で斜めの関係をつくりながら、今日一緒に花壇の整備をしたあのおじさんは、実は商社マンのときにアフリカで頑張っていたんだとか、あるいは地域のこういったことをずっと支えてきた人なんだとか、たまに来て、教壇の上から御説ごもっともで聞くということもあっていいと思うけれども、そればかりでは非常に多感な中学生の気持ちをゲットすることは難しいので、多様な縁づけ、関係づけのバリエーションを増やすということをしてあげる。

ＯＥＣＤからも指摘されているのですが、日本の一五歳は学力のパフォーマンスにおいては世界一ですが、学ぶ意欲についてはワースト2なんですよね。また、高校生のアンケートをとってみても、自分は価値ある人間だというのは四割しかいない。中国、韓国、アメリカの高校生は八割を越えます、まさに、半分以下です。受験という意味では韓国とか中国のほうが激烈なので、受験勉強の影響ではないんですよ。自分は価値ある人間だという自己肯定感は極

めて低い。自分は社会を変えられるという自己効力感も極めて低い。ここが日本の教育の目下最大の問題だと私は思っています。

どうやって中学校のときに自己肯定感、自己効力感を醸成するかというところはすごく重要で、それには小さな成功体験の積み重ねなんですけれども、その前に、憧れの存在との出会いというのがすごく重要です。もちろん教員が憧れの存在になる場合もありますが、教員を目指す子はそれでいいけれども、それ以外のロールモデルと出会えない。教員も大事な仕事ですけれども、世の中には教員以外にもいろいろな大事な仕事があるので、そういう意味で、多様なロールモデル、憧れの存在、本当はそれが、憧れの高校生、憧れの大学生、憧れの二〇代、憧れの三〇代、憧れの四〇代、憧れの五〇代、憧れの六〇代というふうに多様な斜めの関係があるとベストですが――憧れの存在は、どんどん変わっていいと思うんです。ただ、必ずいつも一人か二人憧れの存在がいれば、子供たちはその憧れの存在に少しでも近づこうと思って、自発的な学びが生まれると思います。そういうことを意図的に増やす。結局、職業選択や進学だって、多くの場合は、職業や学校の中身を冷静に分析し、理解し、論理的に選択するというよりも、大好きな家族や兄弟や先輩や友達が選んだ選択肢を自分も選びたいと思える場合には自発的に学び、親や教員からすすめられた場合は、親や教員との人間関係次第で自発的に受動的にもなっているというのが、多くの生徒の偽らざる実態だと思います。

こうしたことは、僕らのときは学校があまりやる必要はなかったんです。なぜならば、法事があれば、おじさん、おばさんがいて、薬剤師をやっているおばさん、銀行に勤めているおじさん、公務員をやっているおじさん、教えている従兄、いろいろな人と会えた。私は、父方と母方で五人ずつ兄弟がいますから、義理のおじ、おばも入れれば二

〇人ぐらい。さらに、従兄弟従姉妹が二〇人くらいいるわけですよね。四〇人もいれば小さな世界で、いろいろな職業・人生があるんだな、みんな頑張っているんだなということが、おのずとわかった。今はかわいそうに、おじさん、おばさんがいないですからね。

要するに、見ている大人の数とバリエーションが激減している。おやじも余り見られていないという感じになっています。夜しか帰ってこないから。そうすると、見ている大人は学校の先生と母親ぐらい。ここは意図的に、いろいろな大人との出会いを増やす必要がある。だから、コミュニティ・スクールなのです。世の中が変わっていったときに、世の中がやってくれなくなったことを学校がやらないといけないと思うんですね。法事の代わりを（笑）。

もう一つは、これは同じ話なんですけれども、昔は兄弟や地域の子供がいっぱいいたから、中学生が幼稚園の子供と遊ぶとかは日常茶飯事でしたけれども、これも今激減していますよね。

私は大学生を小中学校にボランティアとして送り込むＮＰＯの代表をやっているんですが、中学校もありますけれども、小学校のボランティアが一番多いです。毎年、一〇〇人ぐらいの学生が入ってきます。教育学部の学生が中心です。もちろん偏っていますよ。早稲田の教育が一番多いし、東大、お茶の水とか、学芸大もちょっといますね。大学一年生で、教育学部だから子供が好きだと思うんだけれども、教育学部に入ってきているのに、小学生を見たことがないというのがいるんですよ。小学校五、六年生の女の子がいて、こっちは男子学生だったりすると、会話ができないのがときどきいる。勉強はそこそこできるわけです、教育学部に入ってきているわけだから。だけど、「おまえ、それじゃ先生になれないよ。どうするの」みたいな。

割といます。特に異性。女子学生からいうと、男子中学生とか見たことがないんです。例えば、一人っ子だったら見たことないでしょう。かつ、弟がいる確率というのは余りないかもしれない。小学生と中学生は全然違うじゃないですか、特に男は。女子もそうですけれども、違う動物になりますよね。そこを知らないんですよ。だから、学校はそういうこともしないといけないなと。あくまでも学力は、申し分ないとまでは言いませんけれども、世界で一番なので、これは何とか維持して。とにかくいろいろな人との関係の構築ですね。

僕は法哲学会会員でもあるんですけれども、法哲学の井上達夫会長が、日本の問題は、経済の貧困ではなくて関係

性の貧困だとおっしゃっているんです。そのとおりだと思います。中学校時代から様々な人間関係を意図的につくっていかないといけない。

出会いとか――出会っただけではだめで、僕は知人、友人、仲間、同志と言っているんだけれども、今の子は、知人は多いんですよ、フェイスブックあるいはＬＩＮＥをやり始めるとすぐできます。だけど、友人が少ないんです。まして、仲間、同志は少ないんですよ。そういう意味で、かなりディープな、知人じゃなくて友人をつくるとか仲間をつくるとかいった人間関係が物すごく希薄化していると思います。昔の、先生に怒られてでも仲間を守るみたいな、仲間意識ですよね。そういうところがなくなってきました。

編集部　それは確かにありましたね。

鈴　木　意地の張り合いみたいな。それでいいんですよね。

保護者とか教員は、硬くてやむをえないですよね。縦の関係で指導しなきゃいけない。一番厳しいことというか、ルールを守れとかいうのは縦の存在が言わなきゃいけない。だけど、人間というのは幅があるので、どこまでの幅というものをつくってあげるか。

昔は、一番年の若いおじさんとかおばさんがいて、ちょい悪おじさん、「正月はちょっとビール飲んでみるか」みたいな人がいたわけですよね。この存在はすごく重要で、正月のビールはちょっと悪いことだ、だけど、もしもシンナーに手を出したら、このおじさんが烈火のごとく怒りますよね。親とか先生は、宿題やらないのもあかん、酒もあかんし、シンナーもあかん、どれもあかんから、宿題さぼる悪さとシンナーの悪さと酒の悪さの区別がつかないんですよ。だけど、このおじさんは、宿題なんかさぼって、酒は飲めと言うけれども、シンナーをやったら烈火のごとく怒る。子供の時代だからやってはいけないことと、そもそも人としてやってはいけないことの区別が、このおじさん、あるいはおばさんによって分かるんです。縦のラインは、どこかの子と遊んだらあかんとか、デートしたらあかんとか、何でもだめだめだめ。でも、別にデートぐらいええよと。

中学生としてのラインと人間としてのライン、この幅の中でちょっとずつ怒られながらも、この幅からは絶対に落とさないという、このグラデーションが大事。昔は、地域社会だったり家庭だったり親戚づき合いだったり、あるいはいとこのお兄ちゃんの一番年長が悪いことを教えるわけですよね。だけど、いつも一緒に遊んでくれるいとこのお兄ちゃんが烈火のごとく怒ったら、これは本当にいけないことなんだというようなところの幅をどういうふうに、と

いうのが、残念ながらむしろ学校の仕事になってきている。

人間はいいところもあれば悪いところもある。それがだんだん「ゼロ・一〇〇」の議論になってきています。このお兄ちゃんは、赤点食らっても、まあおまえもこういういいところがあるからとか、その役割分担の中で、その幅の中で、うまく人の道を外さずに生きてこれたということなんじゃないかなと思うんですよね。

編集部　先生は世界のいろいろな教育をご覧になっていらっしゃいますので、全国の校長にメッセージをお願いします。

鈴木　今、私は主として高大接続システム改革をやっているわけですが、全国を講演で行脚していると、大体その県の校長会の有力な校長先生たちが来られるんですけれども、まず高校の校長先生に、特に公立の校長先生に相当申し上げたいことは、物すごく近視眼的になっているということです。つまり、大学に入れることをあまりにも気にし過ぎている。進路指導がそのことに血道を上げるのはいいんですが、それは役割だから。だけど校長は――いつも文科省の若い官僚に言うんですけれども、今、学習指導要領改革と入試改革をやっていますが、これは二〇二〇年から本格化するわけですね。この我々がやっている教育改革の対象になる子供たちというのは二一〇〇年まで生きるんですよ。まさに二二世紀まで本当に生きてしまう。特に女の子は大体生きるわけですね、寿命がこれからも伸びるから。本当に二二世紀まで生きる、あるいは二二世紀をつくる子供たちの基礎基本、土台というものを、家庭教育の変容、地域教育の変容、メディアあるいは情報環境の変容、様々な変容の中で、大事なことを最後は学校教育が担わなきゃいけない、あるいは文科省が担わなきゃいけない。そういう仕事をやっているんだよと。

さらに、歴史的な視座というか、僕は近代国民国家システムの崩壊というのが専門なんですけれども、今の近代社会、フランス市民革命一七八九年、アメリカ独立革命一七七六年、そしてイギリスの産業革命もほぼそのころに起こっているんです。それがまずは英仏米で始まって、ドイツ、イタリア、ロシア、そして明治維新で日本に来た。第二次世界大戦後はこれが四つのドラゴン(注1)に行って、ASEAN、BRICs(注2)が近代化、高度成長期を迎え

ました。こういう歴史の流れの中にあって、世界史がまさに一八世紀の後半以来、要するに、二五〇年ぶりとか三〇〇年ぶりぐらいの大きな大きな歴史の大転換期にあるんです。

今の子供たちは、その歴史の大転換期を生き抜いていくわけですが、今の校長先生たち、この歴史観を理解していただきたい。文科省の報告書でも、少なくとも明治維新以来とは言っている。それぐらい価値観の大転換が起こっています。明治維新のときは富国強兵で、第二次世界大戦以後は経済、経済、富国、富国だったわけです。だけど、これからは、幸せの方程式が劇的に変わる。それこそ経済の貧困よりも関係性の貧困、要するに、お金よりも仲間なんですよ。友なんですよ。

例えば、今の問題点は無縁社会あるいは孤立みたいな話ですよね。そうすると、もちろん五〇、六〇歳までは経済も大事だけれども、その後さらに三〇年、四〇年生きていかなきゃいけない、そこで何が起こるか分からない、まさに想定外の社会、想定外の時代を生きていく力、それは誰も答えが分からない。要するに、難問と向き合い、板挟みと向き合い、一人で向き合っていたら詰まってしまうので、だからこそ仲間が必要なんですよね。

学校の現場はずっと同じようなことをしてきているわけです。昔はそれが正解だったんだけれども、社会が変わっているんですね。別に学校は何も悪くないんだけれども、社会との相互関係において、学校の役割とか学校に期待されていることが変わっている。今まで家庭がやってくれたこと、地域がやってくれたこと、親戚がやってくれたことを、その分もやらないといけなくなってしまいました。こうした大転換の中で、社会の変化というものに対してどれだけ敏感にアンテナを高くできるかが課題だと思います。

現場で毎日生徒と向き合わなきゃいけない教員はなかなかそれだけの心の余裕もない。管理職というか指導者の仕事というのは、社会の窓として、日本や世界や時代というものがどう変わっていくのかということについて最も貪欲に学び続けるのがトップの仕事だと思うし、学び続ける、考え続ける、試行錯誤する、誰も答えはありませんけれども、その背中を一般の教員が見て、そしてまたその教員が学び続け、その背中を子供たちが見てという好循環を作る。――先生も分からないことばかりだと率直に中学生に言ったほうがいいんですよ。だからこうやって俺も勉強していると。この世の中、分からないことばかりで、しかも分からないことが今どんどん増えてきている。

二〇一六年五月に、G7の倉敷教育大臣会合がありまし

た。私は議長代行を務めさせていただきましたけれども、あの自信家のフランスが自信喪失に陥っているんですね。フランスというのは国民教育に対してすごく自負をもっていたわけです。だけど、移民の子ではありますけれども、フランスで生まれ、フランス国民教育を受けてきた人が、同胞、同じフランス国民、しかもイスラム教徒を含む国民に対してテロを行った。フランス国民教育が根底から揺らいでいるんですよね。難民がここまで入ってくるというのは二年前には誰も予想できなかった。だけど、去年だけですごい数の難民です。ドイツのメルケル首相がその対応に苦慮しているわけですね。あのメルケル首相ですら、この難問は解けないんですよ。世界最高の総理大臣の一人と言われたメルケル首相ですら、分からないことばかりなんです。

今分からないことがどんどん増えてきているから、だからこそ我々は学び、考え、試行錯誤し、その時代の緊張感というものを校長先生方がシェアしていただきたいなと思います。

最近、県議会とかで、当該県の公立高校から国公立に何人入ったかというのを質問するような県会議員が出てきた。そうすると、県教委の教育長は答えないといけない。御存じのように、県教委というのは高校の先生たちでぐるぐる回しているわけですね。有力校の教頭さんが県教委に行って、今度は有力校の校長になって、校長会の会長になって、そして最後は教育次長でというような、トップ主要高校の三校から五校のナンバー1と2とで一〇人ぐらいのリーダーの意向で県立高校行政が決まっているんですよ。この人たちの頭を変えないといけない。

高校というのは実はすごく多様なんだけれども、高校校長会のトップになる人は大体県下の進学校の校長。県教委の職員を見てみると、有力三校の出身者で八割、九割占められているみたいな状況があって、同質社会になっているわけです。それで「国公立への入学者数を増やすのに頑張らないとな」みたいな、物差しはそれだけで、旧制一中、二中、三中、旧制第一高女、第二高女、大体その五校ぐらいが有力校になっていて、その間で国公立に何人入ったみたいなことで競って、トータルで増えたねとか減ったねみたいなことにすごく矮小化している。入学者数も大事だけど、自分が縁のあった生徒たちに、四〇歳になっても五〇歳になっても七〇歳になっても、高校のときにあの先生のもとで学んでよかったなと思ってもらえるかどうかというのがすごく重要だと思うんです。そういう視点をもってほしいです。

僕は、小学校五、六年生のときに、ませていたので、担任とすごくぶつかったんですね。激烈にぶつかったんです。担任はまだ二五、六歳でしたけれども。これを救ってくれたのは、定年直前の、山形冨男という校長先生だったんですね。本当に恩人です。

卒業してからも、毎年夏とお正月に、字がすごく上手な方で、筆で、しかも日本画も得意で、「頑張ってるか」みたいなお手紙を、亡くなるまで。僕が二五、六のときに亡くなったのかな。だから、卒業してから一五、六年間、ずっと心配してくれて、僕も、大学に入りましたとか就職しましたみたいなことを……。

校長というのは、船長さんですから、風向きが変わり、潮の流れが変わり、思わぬところに岩が出ていたり、そういう全体を見回していく、そういう存在になっていただきたい。

高校に関していえば、私立の校長先生のほうが視野が広いですね。なぜならば、卒業生がしょっちゅう帰ってくるわけですよ。三〇歳の卒業生もいれば五〇歳の卒業生もいる。そうすると、彼らに、ちゃんと顔向けできなきゃいかぬということを体感している。

だから、私立のほうが三〇年、四〇年、五〇年の計で物を見れる、大学の入学試験というのは人生の通過点にすぎないわけですよね。だって、東大へ行ったって全然だめなやつもいるし、そうでないのもいるのを私立の校長先生はみんなちゃんと知っているんです。世の中に出ると、大体ちょい悪なやつのほうが出世しているんですよ。そういうことも分かっているから、「高校のときはそれぐらいじゃないと」みたいなある種の余裕がある。

もちろん、公立校長の置かれている環境には、本当に同情します。議会とメディアの監視体制の中で大変だな、お気の毒だなということに尽きるわけですけれども、その中で、五〇年たったときに、あの校長先生の率いる学校で学んでよかったなと思ってもらえるのは、大変だということはよく分かります。しかし、その板挟みを乗り越えるのがリーダーです。

中学、高校のときの校長先生も覚えていますよ。いまだに入学式の訓示が忘れられない。「運よく選ばれし者の責任」といったことだと思います。この時期は、すごく多感なので、一言一言が入りますよね。校長先生が一生懸命アンテナを張って考えて、しかも悩みながら、そこで考えたこと、思ったこと、感じたことを直接生徒や若い教員にぶつけていくということなんじゃないかなと思います。

編集部　先生から、こういう視点を大事にしてというようなところがあったら聞かせていただきたいと思います。

鈴　木　最近、僕は教育制度改革過剰症と言っているんですけれども、教育制度とか学校制度を変え過ぎというか、いじり過ぎ、また、経営という言葉もよしあしで、経営というのは本当はもっともっと深い意味があるんですけれども、今言われている経営というのは陳腐化してた意味での経営。経営とか制度ということが教育の中で語られ過ぎている感じがする。経営手法を改善すればとか、あるいは制度を改革すればよくなるという幻想があるわけですね。幻想というと言い過ぎかもしれないけれども。

教育というのはもっともっとシンプルで、一人一人の人間と人間のまさに対話なんです、最初も最後も。菩提樹のもとでお釈迦さんと弟子が共にいろいろなことを実践し、そしていろいろなことを交わし合う、これで教えとか学びというのは成立するわけですね。もちろん、クーラーはあったほうがいいし、プールもあったほうがいいし、雨露しのげる校舎もあったほうがいいけれども、教育というものは、本当はもっともっとシンプルで、教員も生徒も人間と人間、お互いに世の中に唯一無二の存在同士の一期一会の御縁の中で、それが三年なのか六年なのか、あるいは転校してしまう人もいるかもしれないから――僕は小学校は四つ行っていますから、山形先生とは二年間なんですよね。また、山形富男校長の話ですが、担任と激烈にやり合っていたときに、今でも覚えているんですけれども、僕の名前は「寛」ですよね、小学校六年生に「寛なれば則ち衆を得」という論語の言葉を書いて渡してくれました。「君のお父さん、お母さんは君に寛容なる人になってもらいたいと思ってこの名前をつけたんだろう、担任の先生を許してやれ」とおっしゃる。これはすごいなと思った。普通は担任の教諭を諭しますよね。だけど、当時六〇歳ぐらいですかね、一二歳の僕と二五歳の先生とで見たときに、六〇から見れば、似たり寄ったりだったんでしょう。

今の制度からしたらあり得ない指導ですよ。だけど、それは僕にとっていい意味ですごい経験で、逆に言うと、ここまで僕のポテンシャルを見抜いてくれたんだというか、いろいろな人をもっともっと許せば衆を得る、民の心を得られますよと。この言葉は、以来、僕の座右の銘になっています。別にだらだら二年間つき合っていたわけじゃなくて、事あったとき、時間にしたらわずか三〇分とか一時間の一瞬のコミュニケーションだけれども、その一期一会の一瞬一瞬のコミュニケーションでもって人間は変わるんで

すよね。だから、ここに集中する。

経営とか制度とか、地方教育行政法のことも皆さんは十分頭に入っておられるので、一回忘れて、地方教育行政法のことは教育委員会や文科省に任せて、学校のトップとして、学びの場で、意味のある一瞬一瞬、一期一会をどうつくっていくかということに集中していただくことが今は大事なんじゃないかなと思います。

文科省とかメディアがうるさ過ぎるんですよね、制度改革や、あるいは学校経営手法がどうのこうの。

何で文科省から制度改革の違う話が出て来るのかその背景をお教えしましょう。

これは結局、政治とメディアからのプレッシャーに関係するんです。実は文科省も、本音では、今ある制度を維持しながら、改良、修正、洗練、あるいは今ある制度の予算の充実をしていきたいと思っているんです。けれども、僕も副大臣をやっていたから分かるんですが、メディアは政治家に新規政策、目玉政策ということを余りにも強く求めるんです。なぜならば、彼らはニュースというものを扱っているから。メディアは、サムシング・ニュー、何か新しいことを探している。何か大事なことを探しているのではないのです。だから、無理やりにでも新しいものを出さないと、大臣、副大臣は、メディアに取り上げてもらえない、仕事をしていると思ってもらえないわけです。

本当はみんな分かっているんですよ、平常は、既存制度の拡充がいいに決まっていると。だって、去年始めて、やっとモデル校がうまくいって、これから展開しようという感じで、何年計画かでやっていくものです。——僕が副大臣のときは記者会見で言いましたよ。そうやって何が今年の新規目玉ですかと言い過ぎるから学校現場が混乱するんだって。僕はいつも記者会見を九〇分やっていましたからね。記者とバトルです。だけど、そこまでやると嫌われる。僕は自信があるから記者ともバトルしていましたが、普通の人は、記者の言いなりになる。本当は、既存政策の継続、定着、進化、拡充、展開がいいと文科省の役人もみんな分かっているんだけれども、政治家を支えるのが官僚の仕事です。記者会見で新規目玉は何だと聞かれたときに、今年は、ありませんとは言わせられない。だから、ちょっとだけ変えて、さも新しいものだというふうにしてやらざるを得ないわけです。

私から見れば、教育委員会や校長は、ちょっと真面目過ぎです。どういう事情で新規施策が現場に降ってきているのかという背景を理解することが必要です。そして、政策

をしっかり現場サイドで取捨選択して、消化して、展開してください。

実は、我が国の教育法体系では、校長の裁量権が法制上はしっかり確保されています。これをもっと使ったほうがいい。思い込みで、校長が自らの裁量権を自らで狭めていますね。周りの目や教育委員会の目を気にしているのかもしれません。そういう意味では、条文をちゃんと、規則、通達に至るまで、しっかり読んでいただきたいんです。校長はやる気になれば、かなりのことができます。ただ何となく今までやっていない、慣習でやっていないだけの話で、徹底的に読んだら、何にも禁じてないということが多いです。あとは、文部科学省はそこまで言っていないのに、尾ひれや類推拡大が働いていることも、本当に多い。ですから、おかしいと思ったら、あきらめずに、きちんと確認していただいたほうがいい。

最近ちょっと変わってしまったけれども、副教材だって使い放題でしょう。それから、教案策定権は教員がもっているわけだし、授業編成権だって校長がもっているわけだし、学期だって校長が決める。校長は実は絶大な権限をもっているんですよ。

そういう意味で、見極めですね。これは文科省や県教育委員会が本気で言ってきている話なのか、メディアや政治にやむなく言わされているのか、見極めてください。そして、字面ではなく、通達の背景、意図、真意を深く解釈して、咀嚼し、自分の学校にしっかり当てはめて、彼ら彼女らの将来にとって、最善になるように、アレンジしてください。世の中に一万校もある中学校の中で、みんな事情が違うわけですから、自分の抱えている児童生徒のためにそれをどういうふうにカスタマイズするか、そこの取捨選択、見極めこそが校長さんの大事な役割だと思います。字面を鵜呑みにしない。クリティカル・シンキングを、校長先生も身に付けていただきたいと思います。

編集部　今日は長い時間ありがとうございました。

注1　韓国、台湾、香港、シンガポール

注2　有力新興国（ブラジル、ロシア、インド、中国）